

【LGS 報告書：2018 年度 海外研修（WHO, Geneva 欧州研修）】

□施日	2018/9/9-9/15
氏名	栢森 健介
<p>【研修要約】</p> <p>私は2018年9月9日から15日にかけてジュネーブ欧州研修に参加した。本研修ではジュネーブに本部を置く WHO をはじめ、国際赤十字新月社連盟(IFRC)、世界知的所有機関(WIPO)、グローバルファン ドなど数多くの国際機関を訪れ、実際にその場で働く方々から直接話を聞くことができた。日本では決して聞くことができない大変貴重な話であり、この上ない経験となった。</p> <p>世界規模で物事を考えるというのは容易なことではない。価値観、倫理観、宗教、文化、所得など いずれも異なる国々に一つの尺度を与えるということである。そこには当然、受け入れやすいものもあれば、そうでないものもある。各国々の状況に合わせた基準を設ける方がずっと効率的で反発も少ないものと思われるが、では、国際機関で行っていることには意義が少ないかという決してそんなことはない。彼らは多彩な背景に配慮しながらグローバルスタンダードを作っている。各国はそれを参考にしながら自国の政策が真に正しいか判断することができる。</p> <p>日本は大変恵まれている。我々は、国際基準から大きく遅れた国々をリードする側である。紛争地域で暮らす人、安全な水を得ることができない人、明日の命の保証がない人が大勢いる。我々が果たさなければならない役割は大きい。</p>	
<p>【印象的な研修内容】</p> <div style="display: flex; align-items: flex-start;"> <div style="flex: 1;"> <p style="text-align: center;">How can antibiotic resistance spread?</p> </div> <div style="flex: 2; padding-left: 20px;"> <p>特に印象的であったのは家畜に対する抗生物質の使用に関する講義である。家畜に与える飼料の中に大量の抗生物質が入っており、それにより家畜の中に耐性菌が生じてしまう。そしてそれを食する人間にも耐性菌が入ってしまうということだ。</p> <p>私は血液内科医として働いているが、このことに関して思い当たることがある。これまで抗生物質による治療を受けたことのない患者の便を調べてみたところ、常在菌の中に耐性菌が認められるのだ。調べてみると家畜から分離されることが多い耐性菌のようである。造血幹細胞移植後など、免疫不全状態では常在菌が感染性をもつことがあるため、この患者には耐性菌にも効果のある抗生物質を選択しなければならない。</p> <p>近年では、医者の間で不要な抗生物質の投与を控える動きがみられているが、それだけでは不十分ということを学んだ。しかし畜産を行う農家にとって抗生物質の使用は、家畜を感染症にさせずに育てる上で必要であり、この問題の解決は容易ではないようである。</p> </div> </div>	
<p>【研究活動への展開について】</p> <p>私は血液疾患、特に白血病や骨髄異形成症候群といった病気の研究を行なっている。決して数が多い病気ではないが、全世界でみられる。WHO は病気それ自体や治療法の研究を行うわけではないが、疫学研究やガイドライン作成などを行なっている。今回の研修内容は、私自身の研究と直接関連するわけではないが、世界規模で物事を考えることを学んだ点で大変有用であった。白血病の治療は年々高度化しており、治療効果の高いものが開発される一方で、その費用は莫大なものである。自分の研究結果が、国の貧富に関わらず、すべての人にとって有用なものとなる、そんなものを目指していきたい。</p>	